未来派の女性論を読む[1)]

土肥 秀行

フィリッポ・トンマーゾ・マリネッティ（1876-1944）による「未来派創立宣言」（1909）11ヶ条のうち、戦争賛美、そして女性蔑視を謳ったことで、次の第9条は最も有名である。

> 唯一なる世界の衛生法たる戦争に栄光あれ。武装、愛国、自由主義の抹消、命を捧げるに足るすばらしき思想、女性蔑視を称えよう[2)]。

戦争賛美の部分についてはすでに論じたことがあるので[3)]、ここではあわせてうったえられている「女性蔑視」（disprezzo della donna）をとりあげてみたい。本稿のタイトルに掲げた「未来派の女性論」とは、この「女性蔑視」を中心とし、時代は初期未来派の活躍した1910年代に限定する。区分の必要性は、1920年代に入ると、マリネッティ個人の活動と未来派の運動は大きく変質するからである。マリネッティと未来派は、ファシズム体制に組み込まれていき、初期の過激さは抑えられ、またマリネッティ個人は若き女性アーティストのベネデッタと結婚し、彼女の活動をサポートすることで女性観を変えていく。当然、女性蔑視からは隔たることとなる。

未来派にとっての女性を論じた先行研究のうち、模範的な論文が日本語で読めることをまずあきらかにしておかなければならない。イタリアの前衛と現代詩研究の第一人者であるチェチリア・ベッロ・ミンチャッキ氏の「未来主義と女性―アヴァンギャルド運動初期の偏見と修正、理論と神話（1909-

1918）―」[4]である。筆者が招へいした氏の東京における講演のもととなった論文の和訳である。本稿は、氏の研究に新たになにも付け加えはしないが、少なくとも「未来派女性宣言」（*Manifesto della donna futurista*）を読むにあたり、問題点の整理と確認には有効となろう[5]。

上の未来派宣言第９条において、戦争賛美にはじまり、「武装、愛国、自由主義の抹消、命を捧げるに足るすばらしき思想」とたたみかけていく流れに不自然さはない。しかし最後に「女性蔑視」とは唐突である。この宣言以降も、戦争の礼賛と女性蔑視の姿勢がセットとなることに、単に男性と女性の対比だけでなく、未来派に特徴的な現象を見出していかなければならない。こういった傾向は、本稿の最後に紹介するマリネッティのエッセイ集『いかにして女性を誘惑するか』まで一貫している。しかしこののちは、戦争賛美の主張が続く一方、女性蔑視路線は変えられることは先に述べたとおりであり、ベッロ・ミンチャッキ氏も指摘するところである[6]。

当時から議論の的となった女性蔑視に関し、本稿では、未来派内の異なる声―真っ先に唱えたマリネッティではなく、別の女性の未来派人―にフォーカスし相対化を図る。そして末尾には、補遺として、その「異なる声」たる関係文書の邦訳を付す。それは、日本では一世紀以上の長きにわたり、様々な未来派の宣言文が訳されてきたにも関わらず未訳に留められて、その重要性からみれば不当に扱われてきたヴァランティーヌ・ド・サン＝ポワン著「未来派女性宣言」である。

いかにしてこのような「女性宣言」なるものが出されることとなったか。いわゆる芸術論（絵画、彫刻、文学、演劇等）とは異なる、広義の「綱領的宣言文」（manifesti programmatici）である。しかも統領たるマリネッティでもなく、他の男性メンバーでもなく、女性の手による。それは、次のような、未来派内の大きな流れを背景とする。1909 年の「創立宣言」後、翌年から美術家たちの参加により、宣言文の書き手が増え、運動の守備範囲が広がり、ジャンル横断的との様相を呈す。「創立宣言」こそ既存の新聞『フィガロ』に載せたが、もはや自前の媒体を発表の場としていく。当初本部のおか

れたミラノから発行されるパンフレットという独立した体裁で、あるいは1912年2月のパリあるいはその他の地での未来派展覧会にあわせたカタログへのテキストとして、次々と発せられていく。続く段階として、独自の雑誌と書籍に載せられるようになる。まずは、フィレンツェのジョヴァンニ・パピーニが未来派に傾倒していたころに、彼が主宰していた『ラチェルバ』（*Lacerba*, 1913-1915）が活用される。その後、大戦中には、『未来派イタリア』（*L'Italia futurista*, 1916-1918年にフィレンツェで発行）や、『ノイ』（*Noi* "われら"、1917-1925年にローマで発行）や、『未来派ローマ』（*Roma futurista*, 1918-1920）が未来派のオフィシャルな機関誌として、多くの未来派の宣言文その他の発表の場となる。当初本部のおかれたミラノから、フィレンツェ、ローマへと活動の場が移動していく流れともパラレルである。また、最後に挙げた『未来派ローマ』はその名が示唆するごとく、ローマという政治の中枢の未来派化を狙っており、未来派党のプロパガンダ用との位置付けであったので、「綱領的宣言文」公表の主要な媒体となる。この週刊誌に発表されたもののうち、1919年5月25日号掲載の「婚姻に抗して」（*Contro il matrimonio*）が有名であり、われわれの論題に関係している。政治（と綱領）の季節は、1919年発刊の書『未来派民主主義』（*Democrazia futurista*, Milano, Facchi, 1919）で頂点をむかえる。前年発表の「芸術運動が政党を創る」（*Un movimento artistico crea un partito politico*）からはじまる宣言文集である。「婚姻に抗して」も再録され、家族制度の否定や相続の廃止（共に自由恋愛への傾斜のため）、労働環境における男女平等、男女普通選挙もうったえられており、当時としては現実味の薄い理念中心の、かなり進歩的な内容であった[7)]。これは実践可能性を度外視した芸術論の場合と同じであるから、（希薄な）イデオロギーの問題というよりは、宣言文自体がもつ自律性に拠ると考えるべきである。

以上、運動の政治化への道筋を手短に示したが、こうして本稿が射程とする時代と文脈の帰結を示しつつ、話を女性論に戻そう。

ここまでの初期未来派の活動拡大の流れのなかで、女性論はというと、当

初より、外部からの批判にさらされていた。特に未来派バッシングの際に、女性蔑視は、適当な標的となった。

まずは、1909 年 2 月 20 日の『フィガロ』紙に「創立宣言」が掲載され、話題となったフランスにおいて反応がある。トゥールーズを拠点とする文芸誌『ポエジー』（*Poésie*）の主宰陣[8]が、未来派を模倣して、レターヘッドに刷られたチラシの形体で「原始主義」（*Le primitivisme*）と題して批判を展開する（「1909 年春」付）。題辞同様、宣言部第 3 条は、オリジナルである未来派宣言第 9 条の内容を反転させる。

> 第 3 条　この度の新しく発表された文書（訳者注、「未来派創立宣言」）は「攻撃的性格」を、つとめて称える。そうした性格が、「武装、愛国、自由主義の抹消、命を捧げるに足るすばらしき思想、女性蔑視」を称揚するからだ。しかしわれわれが称えるのは、平和、労働、秩序と、われわれを生へとむかわせる前向きな思想である。そうして、至高の作品を詩の神に作らせる女性を賞賛するのだ[9]。

未来派の姿勢に根本から批判的なグループなので、なにも女性蔑視の姿勢だけを問題としているわけではない。しかしいくつかの問題点を並記しながらも（マリネッティは戦争賛美と女性蔑視を同列に並べていた）、トゥールーズの詩人たちは、女性については別個に発言し、この点における対立を鮮明にしている。

フランスでは、マリネッティが続けて反論し、その名も「女性蔑視」（*Le mépris de la femme*）との 1910 年 6 月頃執筆の論稿を、翌年の宣言論集『未来派』（*Le Futurisme*）[10]に収録する。これは 1909 年の第一宣言での主張に準ずる。

フランスでの応酬の一方で、イタリアでは、のちに未来派に合流する文人ブルーノ・コッラディーニ（未来派としては短くコッラと名乗る）が、1912 年の時点では、未来派ほど過激ではない自由詩を推進するために、自由派

（liberismo）を名乗りつつ、「われわれの信頼できる仲間に、女性がいる。チェチリア・セリンである。これは意義深いことである」[11]と、未来派へのあてつけともとれる文言を残している。こうして女性蔑視の未来派から距離をとろうとする。未来派に合流しうるほど近いところにいた者にとっても、女性蔑視は問題となる事項であった。

そして同年「未来派女性宣言」を発表するのが、ヴァランティーヌ・ド・サン＝ポワン（Valentine de Saint-Point, 1875-1953）である。20 世紀前半の非常にユニークでで、自律した女性アーティストとして近年注目[12]される彼女については、最低限の伝記的事項を確認しておいた方がよいだろう[13]。

よく触れられるのが、ロマン派の詩人で弁論家ラマルティーヌの遠縁との血筋（ラマルティーヌ家ゆかりの地 Saint-Point をアーチスト名とする）、加えてパリの文壇での世紀末芸術家との交遊が、型破りな性格を用意したということである。第一の肩書である「舞踊家」としては、メタコリー（Métachorie）なる総合芸術を考案し、そのコンセプトを 1913 年 2 月発表の短文「女性の演劇」（*Le théâtre de la femme*）であかしたのち、同年 12 月にパリで『メタコリー』との舞台作品で披露する[14]。この公演をあまり評価しなかったマリネッティとは、1914 年 1 月以降距離をとり、未来派自体とも疎遠となる。一次大戦時にはフランス赤十字に志願、同時に以前から付き合いのあるオーギュスト・ロダンの秘書をする。戦後にカイロに移住、ムスリムに改宗し、フランスの植民地主義批判を展開する。マリネッティとは、未来派を立ち上げる以前の彼が主宰していた『ポエジア』（*Poesia*）誌の同人を通して知り合っていた。マリネッティから直接未来派への合流が打診され、1912 年から翌年にかけて、未来派として「未来派女性宣言」（*Manifesto futurista della donna*）と「未来派情欲宣言」（*Manifesto futurista della Lussuria*）を発表した[15]。

この 2 本の宣言を通してみるサン＝ポワンの主張は、未来派一派という立場で書かれているため、マリネッティに反対はしない。むしろその主張を受け入れ、反未来派と相容れない立場をとる。

まずサン＝ポワンは、いわゆる女性賛歌には肯んじない。「未来派女性宣言」でサン＝ポワンが掲げるモデルが徹底して叙事詩的（例が「エリニュス、アマゾーン」と続くように）であるのは、叙情的な文学のトポス、ミューズとしての女性像を共有しようとしないからである。女性は創造のアシスト役ではないのだ。創造に関して女性の手を経ないというのは、マリネッティが代表作『未来派人マファルカ』[16]でアフリカの英雄的種族の長マファルカ（未来派の理想が具現化した未来派人）が、息子である機械人間ガズルマを、女性の生殖機能を介さず、単為生殖するのを想起させる。出産が男の所業となっているが、もともと男は、「戦争賛美」の「戦争」という破壊を担う役目にある。マリネッティは「戦争賛美」と「女性蔑視」を並べてうったえることで、前者（男性的なるもの）の補強を行う。サン＝ポワンはさらに一歩進んで、「人間を女性と男性にわけるなど馬鹿げている（assurdo）」とし、強者と弱者、勝者と敗者といった違いを否定する。人類はさらに上の段階、「超人」や「英雄」や「天才」の跋扈する世界を目指すようううったえる。

もちろん超人思想やヒロイズムはサン＝ポワンのオリジナルではなく、ニーチェをダンヌンツィオの世紀末芸術観でとらえなおしたマリネッティを通して受け取っていることはあきらかである。先に挙げたマファルカとガズルマといったマリネッティが造形した未来派人をみるとよい。「間違いなくツァラトゥストラからひきだしうるニーチェの３つのライトモチーフ、すなわち意志、超人、飛翔のモチーフをこのアフリカの寓話にマリネッティは織り込んだ」[17]のである。

ゆえに未来派として超人思想を共有するサン＝ポワンの「女性宣言」は、マリネッティの「女性蔑視」の対立項であった「フェミニズム」（Femminismo）も強く否定する。当時のフェミニズムは、社会主義の女性のあいだから興った運動として、男性同等の選挙権や労働権や相続権といった人権を求めていた。サン＝ポワンの唱える超人を目指すべき人類には、人権感覚は相容れない。ましてやサン＝ポワンは、超人を生み育てる母体という特殊な役

割を女性にみているので、男性と同等の条件は必要としないのだった。

同時代フェミニズムへの拒否感もまた、サン＝ポワンだけのものではなかった。サン＝ポワンを直接知っていたとは確認されていないが、一時的に未来派に与していた英国のモダニスト、ミナ・ロイにも共有されていたのは興味深い。彼女もまた国境をこえ、マリネッティやパピーニとつながっていた未来派人で、サン＝ポワンとほぼ同時期、1913 年から 1914 年にかけて運動に密に関わっていた。フィレンツェ在住の彼女が草稿のかたちで残した「フェミニスト宣言」（1914 年 11 月 15 日）[18]は、「現在興っているフェミニズム運動は不適切である」（下線原著者）との書き出しからして、前年に発表されていたサン＝ポワンの「女性宣言」に似る。

サン＝ポワンがその女性論でいきつくところは、「情欲は力である」（原著者は太字で記す）という点であり、女性は母であると同時に娼婦であり、男性の情欲（lussuria）を引き出す能力を認めている。もはや罪ではない情欲あるいは欲望（desiderio）は、男性（人間）が、超人の段階へと上がるのに必要なものである。この点を前面におくのが、サン＝ポワンが残したもう一つの宣言文、「未来派情欲宣言」である。

サン＝ポワンが 1912 年と 1913 年の 2 本の宣言で引き延ばした未来派の女性観は、マリネッティに取り入れられ、大戦勃発後の著作『いかに女性を誘惑するか』[19]収録のエッセイに具現化する。サン＝ポワンの考えがマリネッティに再流入するのは、マリネッティのカメレオン性ゆえ、かつ女性の言説へのオープンな姿勢ゆえである。この本は、マリネッティが自身のドン・ファン振りを披露していく「情欲」賛歌であるが、「単独作」ではない。前線で療養中にブルーノ・コッラに口述筆記させたという意味においてだけでなく、1917 年の初版では、コッラとエミリオ・セッティメッリという 2 人の彼に忠実な未来派人が、連名による序文で、その品がなく時世を鑑みない内容を擁護している。また翌年には増補版として、エニフ・ロベルトとローザ・ロザという重要な 2 人の女性未来派人による批判的な補足説明が追加されるのである（うちエニフ・ロベルトとは翌年に連名で作品[20]を発表す

る）[21]。それはサン＝ポワンが、マリネッティのスキャンダラスな文言「女性蔑視」に対してなしたような、ミューズならずとも、創造的な理論上のアシストを想起させる「共作」であった。こうした後日譚も含むものとしていまあらためてサン＝ポワンの「未来派女性宣言」を読まれたい。

未来派女性宣言[22)]
F.T. マリネッティへの返答

「唯一なる世界の衛生法たる戦争に栄光あれ。武装、愛国、自由主義の抹消、命を捧げるに足るすばらしき思想、女性蔑視を称えよう。」
(「未来派創立宣言」)[23)]

人類は凡庸だ。女性の大半が男性の大半より、優りもせず劣りもしない。女も男も変わらず、等しく軽蔑に値する。

一体としての人類は、天才や英雄が両性において生まれうる土壌そのものなのだ。とはいえ、自然と同じように人類にも、花が咲くに適した季節がある。夏の人類は、その土壌に太陽が照りつけ、天才と英雄にあふれている。われわれはまだ春のはじまりにいる。太陽光は足りず、多くの血と才能が無駄に終わる。

女性であるからといって、血気盛んな真の若者の障壁として立ちはだかってはならない。

人間を女性と男性にわけるなど馬鹿げている。人間には、**女性らしさ**と**男性らしさ**があるだけだ。

どんな超人も、どんな偉大な英雄も、どんな不世出の天才[24)]も、ある決まった時代に人類に起きた突然変異なのである。というのも、女性的要素と男性的要素をあわせもち、女性性と男性性の両方で構成されている完全な存在だからである。

男らしいだけの人間は、実際ただの獣[25)]であり、女性らしいだけの人間もか弱き女でしかない。

個人は集団の一現象であり、個体は決して個別に存在しない。実り多き時代には、沸き立つ土壌から、これ以上ないくらい天才や英雄が生まれ、男性らしさと女性らしさの両方に恵まれる。

戦いにおいて英雄が目立たないとすれば、勇ましさの風が全体に吹き荒れているからである。その時代はひたすら男らしい。一方、英雄らしくあろうとする本能を否定し、過去へと目を向け、平和への夢が広がる時代は、女性性が優勢なのである。

われわれが生きているのは、こうした時代の末期である。**そこで女性に欠けているものとは、男性にとってと同じように、男らしさ**[26]**である。**

というわけで未来派の主張は、大袈裟に語ってはいるが、正しいのである。

女性性に浸かってしまった人類にそれなりの男らしさを取り戻させるには、男らしさどころか野蛮さにまで浸からせないといけない。

とにかく必要なのは、精気あふれる新たなドグマによって、一様に弱々しい男性、そして女性の両性をあわせて、より上位の人類に到達させることだ。

どんな女性でも女性らしい美徳だけでなく、男性的な特質も備えていなければならない。でなければただの女にしかすぎない。

直観力がなく猛々しいだけの男性は、ただの獣である。

とはいえ女性らしさにあふれる現代においては、真逆の極端な例を用いるのが正しい。

よってモデルとしなければならないのは獣である。

兵士が不安に思う女であってはならない。「出発の朝、ひざをかかえた腕が花に埋もれている」女性であってはならない。ただ弱々しく年を重ねるだけの看護婦[27]は、色欲と生活のために男たちを手玉にとる。そんな女性であってはならない。子どもを育てながら、危険や無謀な計画から遠ざけるばかり、よろこびも奪う女性であってはならない。恋愛を娘から、戦争を息子

から遠ざけてしまう女性であってはならない。座敷に巣くうタコのような女性であってはならない。触手でもって人間[28]の血を吸い、子どもたちを貧血にしてしまう、**獣のように愛に狂う女性であってはならない。欲望を刷新力のかわりとしてしまうとは。**

女性といえば、エリニュス、アマゾーンといった女族だろう。セミラミス、ジャンヌ・ダルク、手斧のジャンヌとの導き手もいる。ユディト、「暗殺の天使」シャルロット・コルデは冷酷だ。クレオパトラとメッサリナらは権勢をふるった。男性よりも激しく戦う女戦士、男を誘惑する愛人もいる。破滅に導く者として、奢りと絶望を招き、男でも弱者を打ち砕き、選別[29]を行うのである。「心にすべてをはきださせる絶望」[30]を攻めるのである。

次の戦争では、あの偉大なカテリーナ・スフォルツァに似た女傑が出るといい。カテリーナは地元の都市で籠城をはじめ、外壁の上から敵が自分の息子を人質にして殺そうとしているのを見て、「殺すがいい。型が残っているから、いくらでも作れる」と叫ぶ。

確かに、「世の中は賢知にあふれている」[31]が、本能的な女性は賢くはない。平和を愛慕せず、品行もよくない。

というのは女性は節度というものを知らないからだ。人類がゆるんでいる現代、女性は賢すぎ、平和を愛ですぎ、おとなしすぎるのである

女性がもつ直観と想像力は、利点であると同時に弱点である。

女性は、あくまで群衆に留まる個なのである。英雄につきしたがうが、英雄がいなければ、愚者を支持する。

精神的指導者の使徒伝からすれば、女性は肉体の誘導者[32]だ。生贄としながら救済する。血を注がせては拭う。戦闘し救援する。

同じ時代の同じ女性が、その日の出来事についての気分によって、戦地へと旅立つ兵士をとめようと車の前に身を投げ出しもするし、スポーツの勝者の首に腕をまわしもする。

そういうわけで、どんな革命も女性なしではありえない。女性を蔑むので

はなく、女性を頼りにしないといけない。

これほどお得な獲物はない。熱情あふれる女性に、男性はどんどん近寄ってくるはずだ。

一方、フェミニズム[33]はやめておいた方がよい。フェミニズムは誤った策である。フェミニズムは女性の低能ゆえの誤りであり、本能によったならば気付けたはずだ。

フェミニズムが求める権利を女性に与えてはならない。権利を女性に与えても、未来派が言うような混乱は起きはしないが、むしろ規律が過度に課されるであろう。

義務を女性に課すことも、女性の豊かな可能性を奪うことになる。フェミニズム運動の考察や推論は、女性の原始における定めにおいて見誤りはしないが、女性を偽らせる。そして最悪の過ちに終わる迂回をさせてしまう。

何世紀も昔から女性の直観は批判され、優美さとやさしさばかりが称えられてきた。貧血気味の男は、健康な体と血がおしいので、女性に看護しか求めない。女性はいいなりになってしまう。だがそこで彼女に、これまでにない言葉をかけてやってほしい。戦場での号令をかけてやってほしい。そうすれば女性は嬉々として、直観を取り戻し、思ってもみなかった獲物へとむかっていくだろう。

おまえたち[34]に武器が必要なときには、女性が武器を鋳造するであろう。そうして再度、選別に加担するであろう。

たしかに女性は、一時的な声に惑わされ、天才を見抜けないので、最強の勝者をひたすら称えてしまう。筋肉と負けん気では負けない存在である。獣のように勝るのであれば、間違いはないというわけである。

女性が冷酷さと凶暴さを取り戻すとよいのだが。そうして女性が敗者を、まさに敗者であるゆえにとことんやっつけてしまえばよいのに。敗者を再起不能にするくらい。赦し[35]を説いても無駄である。学ぼうとしても無理であったのだから。

女性たちよ、いまいちど崇高なまで不公平になるがよい。自然の力がそうなのだから。

自制心は捨て、本能を取り戻せ。そうすれば最重要の存在として認められ、定めなど人間の意思で凌駕できる。

相手の男に構わずエゴイスティックで獰猛な母親[36]でいるがよい。子どもたちを独占し、子どもたちに関し権利や義務を主張すればよいのだ。**子どもたちが母親の保護を必要とするうちは。**

男性側には、家庭から解放され、大胆で征服欲あふれた自分自身の人生を歩んでほしい。じゅうぶんに成長したらすぐにでも。いくら誰かの息子で、誰かの父親であるといっても。

種を蒔く男は、芽が出てきたとき畝に留まってはいない。

自分の作品、詩集『自尊心の詩』（*Poèmes d'orgueil*）と小説『渇きと蜃気楼』（*La Soif et les Mirages*）[37]では感傷癖を斥けている。そうした傾向は、蔑むべき弱さであり、精気を縛って封じ込めてしまうからである。

情欲[38]は力である。弱者を砕き、強者を駆り立て、刷新させるからだ。英雄的な種族は官能的である。そんな種族にとって女性は、この上ない褒美となる。

女性は母親か愛人であるべきだ。真の母親は恋人としてはごく平凡であるし、愛人は母親としては甚だ不十分である。生きていく上で同等である二者は補い合っている。息子を得た母は、過去でもって未来を作る。愛人は、未来へと投じられる欲望をふりまくのである。

まとめよう。

女性は、涙と感傷癖で男性をしもべとする。そんな女性は、娼婦に劣るのだ。少なくとも娼婦は、ものにした男に、拳銃を手に下町の縄張りを見栄で維持させようとする[39]。もっとよいことにも費やされるような精気を養わせる女性もいる。

女性たちよ、あまりの長きにわたり、道徳や偏見に振り回されてきたので、もはや崇高なる本能へと戻るしかない。暴虐と冷酷へと。

避け難く生贄[40]として、男たちが戦争で戦っているのだから、子を作るがよい。子らとともにヒロイズムに殉じて、運命の神とともにいるがよい。

あなたたち女性が有利となるよう、男子を育てては減じさせてはならない。より大きな全体にとっての自由のために、全方向的な進歩のために生み育てるのである。

男を、嘆かわしい感傷の奴隷とするのではなく、息子や成人男性を限界の超越へとむかわせるのだ。

そうできるのはあなたたちだけだ。子に対してなら支配を振るえる。

人類がいるから、あなた方の元に英雄がいる。だから、人類に英雄を差し出さないといけない。

ヴァランティーヌ・ド・サン＝ポワン
パリ、1912 年 3 月 25 日
トゥルヴィユ通り 19 番地

未来派運動本部　ヴェネツィア大通り 61 番、ミラノ

注記

この宣言文が、ヴァランティーヌ・ド・サン＝ポワン氏によって読まれたのは、ブリュッセルのジロー・ギャラリーにおける、未来派画家たちの展覧会の折である。それからパリのサル・ギャヴォーにおいて、パリの最良の知識人グループの前で披露された。

ヴァランティーヌ・ド・サン＝ポワン氏は、ラマルティーヌの孫[41]であり、フランスの最良の詩人のひとりに数えられる。

代表作は、*Poèmes d'Orgueil; Poèmes de la Mer et du Soleil; Un amour; Un inceste, Une mort; Une femme et le Désir; L'Orbe pâle; La Soif et les Mirages* など。

（土肥秀行　訳）

註

1)「未来派の宣言文を読む」と題した研究会を、2021 年から 2 年続けて立命館大学で催してきた。成果として 7 名による宣言文翻訳付論稿 8 本がこれまで発表されている（特集「未来派の宣言文を読む」、『立命館言語文化研究』33 巻 2 号［2021 年 11 月］、34 巻 2 号［2023 年 2 月］）。前衛の実践に対し、宣言文の自律性や、宣言文そのものの文学的価値を探る試みである。まずは研究材料として、新訳あるいは初訳の提供を目し、翻訳付の解説という構成で、研究会と同名の『未来派の宣言文を読む』との共著を土肥編により 2025 年刊行を目指している。本稿もその書の一部をなすよう用意された。

2) Filippo Tommaso Marinetti, *Fondazione e Manifesto del Futurismo*, in Id., *Teoria e invenzione futurista*, a cura di Luciano De Maria, Milano, Mondadori, 1998, p. 11.

3) 土肥秀行「未来派の宣言文を読む」、『立命館言語文化研究』33 巻 2 号（2021 年 11 月）、1-10 頁。1915 年発表の、宣言文に近い短文「戦争、唯一なる世界の衛生法」の初の邦訳も含む。

4)『立命館言語文化研究』32 巻 4 号（2021 年 3 月）、3-26 頁。粒良麻央による訳には、筆者と異なる語用（たとえば未来派ではなく「未来主義」）が認められることをことわっておく。この論文に加えて、ベッロ・ミンチャッキ氏の未来派の女性性に関する研究書として、重要な 2 冊を挙げておく。Cecilia Bello Minciacchi (a cura di), *Spirale di dolcezza + serpe di fascino: scrittrici futuriste* (antologia), Napoli, Bibliopolis, 2007; Ead., *Scrittrici della prima avanguardia*, Firenze, Le Lettere, 2012. 未来派の女性アーティストのアンソロジーである前者『甘美ならせん、魅惑のうねり』（マリネッティの妻ベネデッタの 1924 年のグラフィックのタイトルから）が研究資料、後者『初期前衛の女性作家たち』が分析考察となっている。また後者の 1 章から 4 章までを簡潔にまとめたものが、日本での講演「未来主義と女性」とその講演録となる。

5) いわゆる研究書ではないが、未来派に属した女性アーティストの総覧として、前註に挙げたベッロ・ミンチャッキ氏のアンソロジーに加え、重要な 2 冊がある。Giancarlo Carpi (a cura di), *Futuriste. Letteratura. Arte. Vita*, Roma, Castelvecchi, 2009; Mirella Bentivoglio e Franca Zoccoli, *Le futuriste italiane nelle arti visive*, Roma, De Luca, 2016.

6) C・ベッロ・ミンチャッキ「未来主義と女性―アヴァンギャルド運動初期の偏見と修正，理論と神話（1909-1918）―」、前掲、3 頁。

7) こののちフィウメを占領したガブリエーレ・ダンヌンツィオ起草の「カルナーロ憲章」（Carta del Carnaro, 1920 年 9 月 8 日発布）にも労働者に性の別なく、男女普通選挙がうたわれていた。未来派とダンヌンツィオをつなぐ人的交流として、フィウメ事件後の同地に流入したマリオ・カルリら未来派系統のナショナリストや退役軍人によるものがある。ユートピア的とも揶揄された「カルナーロ憲章」の、ファシズム体制下「労働憲章」への影響は、主要幹部ジュゼッペ・ボッタイ自身による証言などからよく指摘される。Cfr. Claudia Regina Carchidi, *Lavoro e socialità nello Statuto della Reggenza italiana del Carnaro*, in Augusto Sinagra (a cura di), *Lo statuto della Reggenza Italiana del Carnaro: tra storia, diritto internazionale e diritto costituzionale*, atti del convegno (Università degli Studi di

Roma “La Sapienza”, Facoltà di Scienze Politiche, 21 ottobre 2008), Milano, Giuffrè, 2009, pp. 70-71. 未来派党が、その消滅後にあらわれるファシズム体制下労働者の権利に遺したものも考えてみなくてはならない。ファシズムが十分に政治化する以前の段階である戦闘ファッシには、すでに政党化したマリネッティが関わっていたという直接的な証拠もある。

8）Touny-Lérys (Marcel Marchandeau), Marc Dhano (Léon Marchandeau), Georges Gaudion の三者。先の二人は、息子と父の関係にあり、ガヤックの名家の出である。

9）Matteo D’Ambrosio (a cura di), *Nuovi archivi del futurismo. Manifesti programmatici. Teorici, tecnici, polemici*, Roma, De Luca, 2019, pp. 11-12.

10）F.T. Marinetti, *Le Futurisme*, Paris, E. Sansot & Cie, 1911, pp. 57-69. この論集においては、論稿「女性蔑視」は、「戦争、唯一なる世界の衛生法」（*La guerre, seule hygiène du monde*, pp. 53-56) に続き掲載される（pp. 57-69)。「女性蔑視」のイタリアでの初出は、1915 年の論集『戦争、唯一なる世界の衛生法』（*Guerra sola igiene del mondo*, Milano, Edizioni Futuriste di Poesia, 1915) である。イタリアの参戦論推進を目的とした書であるため、戦争賛美の文章は、書名となるまで格上げされる一方、「女性蔑視」は改題され、「反恋愛、反議会」（*Contro l’amore e il parlamentarismo*, pp. 87-93) となり、女性蔑視路線は受け継ぐも、恋愛の否定は自由恋愛へ、腐敗した議会政治に女性を投入しよう、選挙権を認めよう、とアイロニカルに主張する。伊語版には、仏語版と比べて、若干の省略と細かな段落分けがなされているだけだが、1915 年のイタリアの参戦前夜の文脈で読むと、むしろ女性蔑視のトーン変調の兆しが感じられる。それはベッロ・ミンチャッキも、この宣言文について指摘するところである（C・ベッロ・ミンチャッキ「未来主義と女性―アヴァンギャルド運動初期の偏見と修正，理論と神話（1909-1918）―」、前掲、p. 6）。

11）M. D’Ambrosio（a cura di）, *Nuovi archivi del futurismo*, cit., p. 87.

12）仏語の最新評伝は、副題『前衛熱から東洋趣味まで』から予測できるように、彼女の波乱万丈の人生をドラマチックに描く（Elodie Gaden et Paul-André Claudel, *Valentine de Saint-Point. Des feux de l’avant-garde à l’appel de l’Orient*, Rennes, PUR, 2019）。こうした扱い方とトーンは、サン＝ポワンにまつわる言説の常套である。

13）伝記記述は以下を参考にしている。Jean-Paul Morel, *Vita di Valentine de Saint-Point*, in Valentine de Saint-Point, *Manifesto della donna futurista*, testi raccolti e annotati da J.-P. Morel, traduzione di Armando Lo Monaco, Genova, il Melangolo, 2006, pp. 81-85.

14）メタコリーについての、理論から実践への一連の流れは次に詳しい。Silvia Contarini, Il teatro della donna, *di Valentine de Saint-Point*, in «Italogramma», vol.4 (2012), pp. 303-313.

15）前者には「1912 年 3 月 12 日」、後者には「1913 年 1 月 11 日」との日付がつく。共に伊語版がミラノの未来派本部よりリーフレット形式で発表されている。1914 年刊行の初の宣言集（AA.VV., *I manifesti del futurismo*, Firenze, Lacerba, 1914）にセットで収録されて以降幾度となく印刷され、定番の宣言に数えられている。後者については、高村光太郎訳が「未来派夫人の楽欲論」として『我等』（第 1-3 号、1914 年 3 月）に発表されている（前者はこれまで未訳)。2 本の宣言のオリジナルはイタリア語で書かれ、

あるいは少なくとも伊仏版が並行して書かれた。現在ではサン＝ポワンによる未来派関連の文章全6本は、一冊にまとめられている。仏語版と伊語版の両方がある。Valentine de Saint-Point, *Manifeste de la femme futuriste*, textes réunis, annotés et postfacés par Jean-Paul Morel, Paris, Éditions Mille et une nuits, 2005; Ead., *Manifesto della donna futurista*, cit.

16）F.T. Marinetti, *Mafarka le futuriste. Roman africain*, Paris, Sansot, 1909; Id., *Mafarka il futurista*, traduzione di Decio Cinti, Milano, Edizioni Futuriste di «Poesia», 1910. 仏語による原著に続き、（マリネッティは伊語でも書いたが）秘書デーチョ・チンティの訳で伊語版が翌年に出ている。このあとわいせつ裁判が何年も続くことになるのだが、結局は罪に問われなかった結果はさておき、スキャンダルが、宣伝として、却って未来派の名声を高めている。未来派において、醜聞が、運動推進の手段化するきっかけとなった。

17）Luciano De Maria, *Introduzione*, in F.T. Marinetti, *Teoria e invenzione futurista*, cit., p. XXXVI.

18）Mina Loy, *Feminist Manifesto*, Firenze, Nov. 15th [1914], manoscritto, in M. D'Ambrosio（a cura di）, *Nuovi archivi del futurismo*, cit., p. 67. ミナ・ロイの「先見性」については日本語論文がある。高田宣子「天才へのまなざし（1）――ミナ・ロイが照らし出す1910年代のアヴァンギャルドたち――」、『成城文藝』203号（2008年6月）、51-65頁。

19）F.T. Marinetti, *Come si seducono le donne* [1917-1918], a cura di C. Bello Minciacchi, Milano, Rizzoli, 2015. いまや有名な「未来派料理宣言」（1930）同様の奇矯さゆえ新版が出るにいたったと考えられるが、監修のベッロ・ミンチャッキは、この本の「陳腐さ」に自己批判を読み取り、意外な深みをみる。

20）一種の往復書簡小説『女の腹―外科小説』である。F.T. Marinetti e Enif Robert, *Un ventre di donna: un romanzo chirurgico*, Milano, Facchi, 1919.

21）『いかに女性を誘惑するか』の成り立ちについては、新版監修者による説明を参照のこと。C・ベッロ・ミンチャッキ「未来主義と女性―アヴァンギャルド運動初期の偏見と修正，理論と神話（1909-1918）―」、前掲、18-22頁。

22）ここに訳出するのは、オリジナルとされる伊語による「未来派女性宣言」（*Manifesto futurista della donna*）である。パリ1913年3月25日付、ミラノの未来派本部（Direzione del Movimento futurista）発行のリーフレットを底本とする。文中の太字は原著者による。

23）F.T. Marinetti, *Fondazione e Manifesto del Futurismo*, cit., pp. 10-11.

24）「超人」（superuomo）や「英雄」（eroe）や「天才」（genio）のいる世界は、男女に分かれ、強者と弱者に分かれ、勝者と弱者に分かれている現在の世界よりも段階が上と位置付けられる。男性のように強者や勝者を目指すのではなく、そのような違いのない世界を目指すよう「未来派女性宣言」はうったえている。

25）「獣」（bruto）とは、ダンテ『神曲』「地獄篇」第26歌にある、オデュッセウスによる船員を奮い立たせるための言葉「諸君の生まれを考えてみよ。／諸君は、獣のように生きるべく生まれついてはいない。／徳と知を求めるべく生を授かったのだ」（118-120行）にある、人間らしい徳や知のない「獣」と同じ語である。Cfr. Dante Alighieri, *Commedia. Inferno*, a cura di Giorgio Petrocchi, Milano, Mondadori, 1966, p. 110. ここではただの「（か弱き）女」（femmina）同様、忌むべきものとして扱われる（のちほど「獣」

はポジティブなニュアンスに転じるが）。

26）この文章内で、「女らしさ」（femminilità）と「男らしさ」（mascolinità）は、ニュートラルにそれぞれの特徴を示す語として使われるが、註をふった箇所のような特定の場合においては、「男らしさ」（virilità）であり、ポジティブな価値として性的な要素を含み、「情欲」（Lussuria）の近接概念となる。

27）この文章に頻発する看護婦のイメージは、男性らしく戦う兵を救い癒すが、本質である戦いを中和する悪しき存在である。ネガティブな女性らしさが具現化した存在である。この文章が発表されたのち、一次大戦が勃発すると、サン＝ポワンは赤十字に志願する。女性は実戦に出られないので、女性に許された「戦場」へとむかったのである。

28）イタリア語では uomini は男性、人間を意味するが、この文章では、ほぼ常に、「女性」（donne）の対である男性の意で使われており、「男性」（uomini）がもつ代表性（男性＝人間）が許容されていない。この一文だけは、タコに対しての人間の意味が強い（タコが女性に重ねられる一方、人間は男性に近いのであるが）。

29）人類の選別であるが、マリネッティの「創立宣言」で最も有名なフレーズ「戦争、唯一なる世界の衛生法」（第９条で「女性蔑視」とともに語られているフレーズ）にある「衛生法」と呼応する。

30）未来派の総帥マリネッティは第一宣言に続いて発表した短文「月光を殺そう」（*Uccidiamo il chiaro di luna!*）で未来派が掲げる詩的イメージを鮮明にする。「心がすべてはきだすところの絶望」志向と言うのである（F.T. Marinetti, *Uccidiamo il chiaro di luna!* [aprile 1909], in Id., *Teoria e invenzione futurista*, cit., p. 16）。

31）Ivi. 前註「絶望」の引用同様、マリネッティ「月光を殺そう」より。「わたしにしてみれば、君たちに言っておくが、世の中は賢知にあふれている。ゆえにわれわれがさらに教訓とするのは、日々信条とするべき英雄崇拝、心がさらけだされるところの絶望嗜好、習慣としての熱狂、幻惑への服従である」と続く。

32）精神的あるいは肉体的な誘惑について、サン＝ポワンによるもうひとつの重要な宣言書「未来派情欲宣言」においては、「自尊心同様、情欲は指導的な美徳なのである。なかで精気を養う住処である」と冒頭部で述べる（Valentine de Saint-Point, *Manifesto futurista della Lussuria*, Milano Direzione del Movimento Futurista, 11 gennaio 1913）。よってサン＝ポワンにおいては、それが肉体面に関する場合でも、妖しさを醸しながらも、教唆には一貫してどこかポジティブなニュアンスがある。

33）「フェミニズム」（Femminismo）はもちろん現代の女性運動とは異なる。マリネッティの「創立宣言」では先に挙げた９条のあと、10 条に「博物館を破壊しよう。図書館やあらゆる学士院をなくさなくてはならない。道徳重視、女性主義（femminismo）、迎合し損得でしか考えない弱虫を糾弾する」（F.T. Marinetti, *Fondazione e Manifesto del Futurismo*, cit., pp. 10-11）とあり、同じ語（femminismo）が使われていた（語頭を、マリネッティは小文字、サン＝ポワンは大文字とする違いはあるが）。イタリアでは 19 世紀後半から選挙権を中心に、財産や相続にまつわる権利が女性に認められるよう、女性が担う運動が、社会主義運動のなかに生まれていた。femminismo の語は、フランス

語 féminisme の翻訳で 19 世紀末には存在していた。マリネッティは、フェミニズムの政治的文脈をふまえず、小文字の f ではじまる同調しやすく教条的な「女性らしさ」を意図して使用していたが、サン＝ポワンは、同時代の女性の運動を意識し、「正しく」用いている。

34）男女の別のない「おまえたち」（voi）は、非人称として使われているが、一人称単数「わたし」は筆者＝女性、三人称複数「女性たち」との関係においては、男性性を帯びてくる。もちろん女性に問題がある場合、上位にいる男性が対処する、あるいは女性自身が対処すべきなので、より直接的な「あなたたち」が女性たちにむけられる

35）「赦し」（giustizia spirituale）は、告解につづくべき、罪の赦しであるが、宗教的タームを用いて、女性と罪人を重ね合わせるのはこの文章の常套である。先にも肉体の誘惑者との、聖書における罪人の典型的なイメージを引用していた。完全にネガティブな文脈ではないのであるが。

36）女性から母性を切り離さないサン＝ポワンにとって、女性は家庭的な存在であり（情欲はあくまで内なるもの）、女性はやはり社会的な権利（と義務）をもちえない。

37）*Poèmes d'orgueil*, Créteil, L'Abbaye, 1908; *La Soif et les Mirages*, Paris, Eugène Figuière, 1912. ともに彼女の文学サークル仲間が興した小規模な出版社から出ている。

38）「情欲」（Lussuria）は、言うまでもなく、大罪のひとつに数えられる。しかし古来罪人の女性が解放されるように、情欲の大罪も価値の反転を経て、サン＝ポワンの女性論の核となって、次の宣言「未来派情欲宣言」の表題に冠される。

39）娼婦、拳銃、下町といったイメージは、自然主義由来のものである。また活劇風であることから、マリネッティ「創立宣言」に描写された、獣的な機械である車での走行シーンと通じ合う。

40）「生贄」（decima del sangue）は、中世における家畜による物納を指す。ここでの「産めよ殖やせよ」の考えは、人間を人間としてではなく、獣とみなしている。

41）正確には曾孫である。アルフォンス・ド・ラマルティーヌは 1790 年生、ヴァランティーヌはその 85 年後に生まれている。